

[実践報告]

大学生まちづくり教育の可能性について

—和歌山県古座川町を事例に—

小林 等, 三木日出男

〈要 約〉

日本各所にて交流人口の増加による地域活性化の取り組みが行われている。大学においても地域活性化をテーマとした学習は実践的な社会勉強の場として積極的に展開されている。観光による経済の活性化は、重要な国策のひとつに位置づけられており、その政策を担う観光人材の育成・強化が求められている。本研究では、和歌山県古座川町で実施された実証事業スタディケーションに基づき、大学生まちづくり教育のあり方と課題について考察する。

キーワード：スタディケーション, まちづくり教育, 古座川町

1. はじめに

1.1 背景

2021年日本の総人口は1億2,568万人（総務省統計局2021年12月20日公表）である。「日本の将来推計人口」（2017年国立社会保障・人口問題研究所）によると将来推計人口は、2040年1億1,092万人を経て、2053年には1億人を下回り9,924万人となり、2065年に8,808万人になると公表された。日本の人口は確実の減少局面に入り、人口減少に歯止めが利かない地方自治体は、遠くない未来を予測して危機意識を強めている。

2014年5月に日本創生会議人口減少問題検討分科会は、国内約1,800の市長村のうち約半数の896市町村が2040年までに消滅の可能性があると発表した。国も2014年11月に「将来にわたって活力ある日本社会を維持していくために、まち・ひと・しごと創生に関する施策を総合的かつ計画的に実施する」として地方の課題解決に向けて取り組みを開始した。地方の各自治体においても定住人口の増加、産業振興による雇用の確保に向けた総合的な戦略などを策定し、「静かなる危機」に備える動きが広まった。

地方創生の一策として、観光を介した交流人口の増加による地域活性化を目指す地域が増えてきた。また、2003年には広く観光客を呼び込み経済の活性化実現を意図した観光立国化の宣言がなされた。コロナ禍前の2019年日本人国内旅行消費額は約21.9兆円、訪日旅行外国人旅行消費額は約4.8兆の経済効果をもたらしている。

国が策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」では、「観光資源の魅力を極め地方創生の礎に」として観光資源の磨き上げや滞在型農村漁村の確立・形成、インフラ整備などの諸施策を打ち出し、交流人口増加による地方創生の対策を打ち出している。このビジョンでは「観光経営人材の育成・強化」として、「観光経営を担う人材育成」、「観光の中核を担う人材育成」、「即戦力となる地域の実践

的な観光人材の育成強化」といった3つの方針を立て観光人材教育の抜本的な育成・強化の必要性を指摘している。

観光を通じた地域活性化の実現は社会的な要請でもあり、そのためには実践的な観光の取り組みができる人材の育成が不可欠な時代になってきたと言える。

1.2 研究の目的

国の方針にも示されているとおり、地域観光の中核を担う人材育成の強化が求められている。人材育成の実践的な学びの場として、観光系学科を設置する大学は地方自治体と協定を結び、学生達は現場に出向き、地域の課題解決プランを提言するという機会が増えている。大学側としてみればこの取り組みは、行政・観光協会・住民・企業の方々と直接的な交流ができる機会となる。観光教育という視点で見ると現場の空気を感じながら実践的な社会勉強ができる場となる。学生を受け入れる地方自治体にとっても学生（域外の人間）の発想に基づく提言を参考に「まちづくり」施策のヒントを求めるケースも多々あると想定する。

しかしながら、大学と地域の連携は両者が共通の目標を定めて、双方が共感できる創造的なアウトプットができなければ一時的な取り組みとして終息してしまう。田村明（1987年）が指摘する「まちづくり」という考え方は単発的で短期的な考え方ではなく、長期にわたり、終わりのないものである。

本研究では、2021年10月に大学生が参画した古座川町まちづくりの実証事業を踏まえ、「効果的な大学生まちづくり教育」を検証し今後の可能性と課題を明らかにすることを目的とする。

1.3 論文の構成

本稿の構成であるが、第2章では実証事業のフィールドとなった古座川町の実態を把握するため、古座川町が発行した「古座川町第5次長期総合計画」を参考に当地の観光政策の要点についてまとめた上で政策の実行部隊となる古座川町観光協会の取り組みと課題を整理した。第3章では、大学生が取り組んだ古座川町スタディケーションの成果物と学生の意見を整理の上、古座川町観光協会とメディアの評価を記述した。第4章では、まとめとして観光教育あり方と可能性について考察した。

2. 古座川町の現状

2.1 古座川町の概要

古座川町は和歌山県南東部に位置し、東西19.5km、南北21.7km、面積は294.23km²を有し町面積の96%は森林である。山々の間を大小の溪谷や河川があり、古座川町のシンボリックな河川である古座川は大塔山（標高1,122m）が源流部となり全長64kmが古座川町の中央を流れている。

古座川町は1956年に高池町、明神村、小川村、三尾川村の1町4村の合併によって生まれた町である。合併当時は1万人規模の人口であったが2021年1月現在は2,581人と人口減少が進行している。65歳以上の高齢者人口は2015年（平成27年）では52.7%と和歌山県下一の高齢化（表2-1）の町となっている。

また、2015年（平成27年）に策定された「古座川町地方人口ビジョン」によると人口の将来展望は2060年（令和42年）では約1,400人の確保を目指しているが、同年における国立社会保障・人口問題研究所（社人研）による将来推計人口は946人と予測されている（図2-2）。



図2-1 古座川町地図

出典：古座川町役場ホームページ

表2-1 古座川町の年齢3階級別人口割合の推移

単位：人，%

項目	年	2000年	2005年	2010年	2015年
総人口		3,726	3,426	3,103	2,826
年少人口 (15歳未満)		337 9.0%	309 9.0%	262 8.4%	221 7.8%
生産年齢人口 (15歳～64歳)		1,801 48.3%	1,586 46.3%	1,345 43.3%	1,116 39.5%
老年人口 (65歳以上)		1,588 42.6%	1,531 44.7%	1,496 48.2%	1,489 52.7%
世帯数		1,650	1,585	1,484	1,378
1世帯当人数		2.26	2.16	2.09	2.05

出典：古座川町第5次長期計総合計画 後期基本計画 2020-2024 pp.8に基づき筆者作成

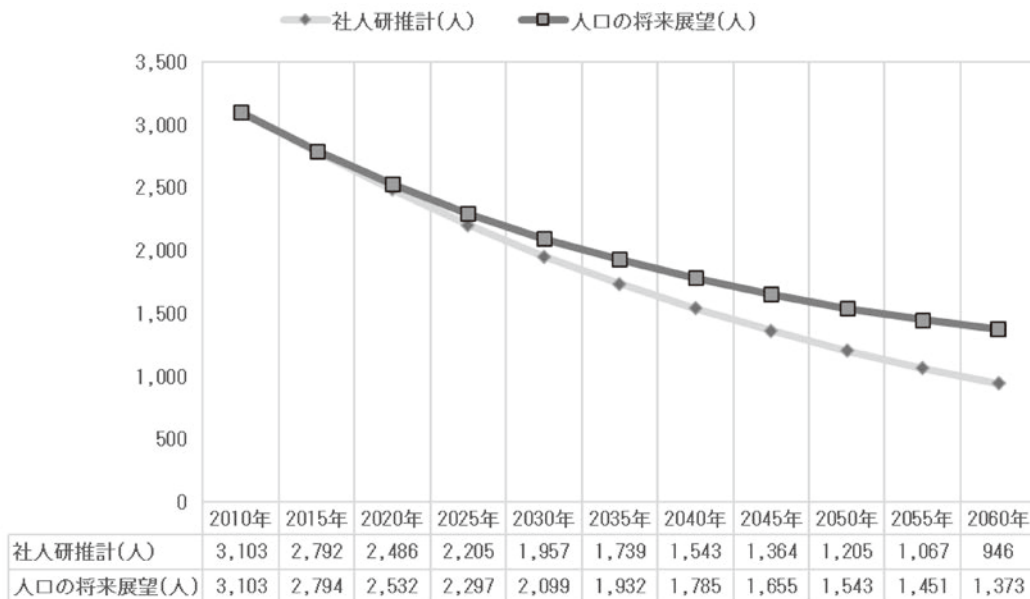


図2-2 古座川町 人口将来展望

出典：古座川町第5次長期計総合計画 後期基本計画 2020-2024 pp.3に基づき筆者作成

2.2 古座川町まちづくり計画

古座川町は2015年から2024年までの10ヵ年を対象期間とした「古座川町第5次長期総合計画」（以下「長期総合計画」という）を策定し、各種の施策について取り組んでいる。本節では古座川町の総合計画に基づき交流人口増加につながる観光の観点から古座川町まちづくり計画について整理する。

2.2.1 産業分野における課題

古座川地方は良質の木材の産地として栄えていたが近年の構造不況により低迷が続いている。1950年代は年間7万m²ほどの木材が産出されていたが外材の輸入自由化により木材の価格が低下し、1980年を境に厳しい状況が続いている。農業については稲作、野菜栽培、柚子などが主たる産物である。高齢化による生産性の低下、後継者不足、休耕田、荒廃林といった課題があるが、若手農業者への休耕田の提供や柚子農業は、生産・加工・販売を行い農業所得の向上を目指している。古座川町における林業・農業とも全体としては基盤強化の途上である。

町内における雇用の状況は、公共機関の他、福祉（社会福祉法人）、観光（一般財団法人）、特産品（農事組合法人等）などの団体雇用が主である。民営の建設業、製造業、サービス業も存在するが、いずれも小企業や個人経営となっており、将来を見据えた定住人口の増加に向けた雇用の確保が課題となっている。

2.2.2 古座川町まちづくり重要項目

長期総合計画の策定にあたって、町民の意識構造の実態を把握するためのアンケート調査「古座川町らしいまちづくりのために重要な項目」（n=249 2019年7月～9月）実施された。調査の結果、災害対策、自然の保全、生活等のインフラ整備に続き、観光産業の充実（15.7%）が上位10位内に挙げられている（図2-3）。町民の生活基盤の安定と観光産業の充実により観光を支える観光関連従事者の増加や観光収入による増収効果の期待を寄せていることが伺える。

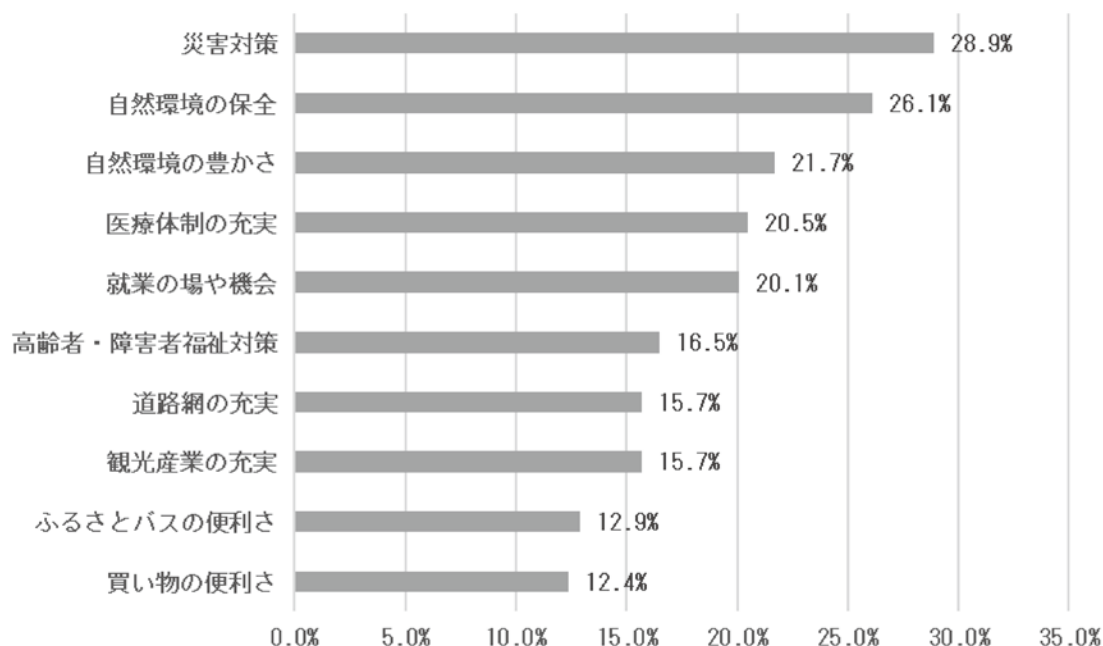


図2-3 古座川町らしいまちづくりのための重要な項目（複数回答，上位10位）

出典：古座川町第5次長期計総合計画 後期基本計画 2020-2024 pp.14に基づき筆者作成

2.2.3 古座川町の観光・交流事業計画

古座川町の観光客数は新型コロナウイルス感染症拡大前の2019年においては約13万5千人となっている。古座川町は京阪神方面からJR紀州本線や阪和自動車道路を利用して訪れる観光客が多い。観光目的は、川釣り、キャンプ、川遊び、花見、温泉、保養が中心である。特徴的なところでは、町内には宿泊施設が少なく宿泊数が総体的に少ない点である（表2-2）。

表2-2 古座川町の観光客推移

単位：人，%

項目	年	2000年	2005年	2010年	2015年
観光客入込客数		95,998	98,870	129,621	121,250
うち宿泊数		7,814	6,181	6,221	6,383
宿泊率		8.1%	6.3%	4.8%	5.2%

出典：古座川町産業振興促進計画令和2年2月25日に基づき筆者作成

古座川町における主たる観光資源は、自然資源（古座川、一枚岩、滝の拝、虫喰岩、牡丹岩、天柱岩、少女峰など）と体験アクティビティ（キャンプ、カヌー・水遊び、鮎釣り、サイクリング、トレッキングなど）に分類される。

長期総合計画によると古座川町を取り巻く観光振興の取り組みは段階的に進み、交流人口が増加しているものの観光客を受け入れる対応が不十分で経済的効果が出ていないとしている。課題としては観光施設、観光事業者、物産販売事業者が連携した取り組みを図ること、観光客が夏場に集中すること、宿泊施設増設の検討、冬場の誘客が挙げられている。

古座川町は、「観光・交流資源の充実・活用」「地域特性を活かした観光・交流機能の充実」「PR活動の推進と観光案内の整備」「広域観光体制の充実」「観光推進体制の推進」といった5つの主要施策を掲げ、2023年目標（年間）として観光入込客数176,000人、観光宿泊者数8,800人、観光イベント参加者8,500人を目指している。

2.2.4 古座川町観光協会の取り組み

古座川観光協会は地域の観光振興に資する情報の発信を目的に2018年9月27日発足した。協会の運営方針は、観光情報の発信に留まらず、町の財政負担軽減のための収益事業や関係人口の拡大、持続可能な自然資源利用など幅広い活動を目指している。観光協会は地元で事業を営んでいる会長、副会長のリーダーと地域おこし協力隊3名合計5名の体制で運営している。また、観光協会の会員数は団体会員24、個人会員87となり、地元住民、事業者、団体と共に古座川町の将来を見据えて連携を図りながら活動を行っている。

古座川町観光協会の主なミッションは古座川の観光情報を発信することとされているが、この他にイベントの開催や地元観光関連事業者のとりまとめ、道の駅運営、レンタルサイクルなどの事業運営、域外の企業・教育機関との連携事業など、地域の観光振興に資する多岐に亘った取り組みを行っている（表2-3）。

表2-3 古座川観光協会の活動内容

年度	項目	活動内容
2019年度	情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・協会ホームページ制作 ・SNS (Facebook, Instagram) の立ち上げと発信 ・YouTubeチャンネルの開設
	イベント	<ul style="list-style-type: none"> ・古座川サクラ月間の開催 (植樹・観察会) ・古座川恵み発見フェスの開催 (ジビエ・特産品) ・川の家実施 (串本古座高校共催)
	協会事業	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅運営 ・観光対応 (ツアー対応・仲介, 来客, 営業, 近隣連携等) ・レンタルサイクル事業 ・サイクリングマップ制作 ・クマノザクラ学習事業
2020年度	情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・協会ホームページ追加制作 古座川ナビ ・SNS (Facebook, Instagram) の発信 ・YouTubeチャンネルの配信
	イベント	<ul style="list-style-type: none"> ・古座川サクラ月間の開催 (こどもガイド・植樹・観察会) ・古座川サイクリングフェス2020の開催
	協会事業	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅運営 ・観光対応 (ツアー対応・仲介, 来客, 営業, 近隣連携等) ・レンタルサイクル事業 ・ジオスタンプラリーの実施 ・クマノザクラ学習事業 ・写真部会事業 フォトコンテスト ・未来を彩る花の郷づくり事業 ・川あそびグッズ (eポート) の購入 ・日本航空とキャリア教育の実施 ・河川利用検討委員会の設置
2021年度	情報発信	<ul style="list-style-type: none"> ・協会ホームページ追加制作 古座川ナビ ・SNS (Facebook, Instagram) の発信 ・YouTubeチャンネルの配信 ・VRを活用した観光PR
	イベント	<ul style="list-style-type: none"> ・古座川サクラ月間の開催 (こどもガイド・植樹・観察会)
	協会事業	<ul style="list-style-type: none"> ・道の駅運営 ・観光対応 (ツアー対応・仲介, 来客, 営業, 近隣連携等) ・レンタルサイクル事業 ・会員意見交換会 ・フォトコンテスト ・VR映像制作 ・RIZIN YouTubeチャンネル制作 ・河川利用検討委員会の設置 ・JR 銀河 特産品販売及び観光PR ・観光庁 域内連携促進に向けた実証事業 (スタディケーション, ワークーション, インバウンド誘致, キャンプ)

出典：古座川町観光協会ヒアリング調査に基づき筆者作成

2.2.5 古座川町観光協会の問題意識

古座川町にて観光資源の視察と古座川町観光協に対して当地の課題を明らかにすることを目的にヒアリング調査を行った。

- ① 調査対象：古座川町観光協会 4名
- ② 調査内容：古座川町の課題について
- ③ 調査日：2021年7月22日（木）13：00～14：30

調査の結果、以下の点が明らかになった。

【ハード面】

- ・宿泊施設が限られている。（ぼたん荘以外は全て民泊。正規稼働は7ヶ所のみ）
- ・キャンプ場は道の駅「一枚岩」のみである。（ごみの投棄問題、駐車場問題がある）
- ・廃校の活用方法。（町内には3ヶ所の廃校が存在するが下露、耐震の問題もある）
- ・1次産業従事者の高齢化（後継者、担い手が見つからない）
- ・絶景の場所で電波が入らないところがある（植魚の滝・ハリオの滝・中津谷の滝）

【ソフト面】

- ・各事業者の連携が取れていない、取り方が分からない。
- ・コンテンツの活かし方、価格の決め方、見せ方が分からない。
- ・SNSの情報発信はお金を落としたくなるような見せ方になっていない。飲食店などに誘導できるような紐づけになっていない。
- ・旅行者等へ提案できるツアー商品が極端に少ない。
- ・秋、冬の集客が弱い。

2.2.6 小括

古座川町の人口減少は今から対策を講じないと現状の2,581人（2021年1月現在）から2060年には946人（社人研推計）となることが予測されている。古座川町はこの課題に対応すべくまちづくりを計画的に進めていくための基本計画を策定した。基本計画の中には、「観光・交流事業の振興」という目標が含まれている。

古座川町には豊かな自然と自然資源を活用したアクティビティや柚子、ジビエ、鮎といった地域の特産ブランドが存在する。行政・観光協会、地域の事業者、住民らは古座川町の豊かな自然資源を観光に結びつけ、地域活性化の一助となることを期待している。

一方、古座川町観光協会のヒアリング調査の結果、各事業者間の連携、事業の担い手といった観光人材に関連する問題や観光コンテンツ・プライシング・情報発信など観光のシクミづくりに苦戦していることが分かった。この現状を打破するためには域外との人材交流を重ね観光のシクミづくりを構築していく必要があると考える。

3. 観光庁の実証事業

観光庁の実証事業に基づき古座川町の新たな取り組みについて整理する。

3.1 実証事業の概要

3.1.1 観光庁の目的と方向性

新型コロナウイルス感染症の影響により、観光需要は大きく落ち込み、観光事業者は厳しい状況下にある。そこで観光庁は、2020年度に魅力的な滞在コンテンツ造成し、効果的・効率的に誘客を取

り組む環境を整備するべく「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成実証事業」を実施した。また、2021年度には地域の多様な関係者が連携し、観光コンテンツの造成・開発を支援する「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」の公募を行った。この域内連携促進に向けた実証事業では、新型コロナウイルス感染症により観光地が大きな打撃を受けている中で、今後の失われた観光需要を回復させることを趣旨としている。そのためには、地域に眠る観光資源を磨き上げ、より一層地域の魅力を高めるとともに、感染拡大防止策を徹底し、安心・安全な新しい旅のスタイルを普及・定着させていくことが求められる。さらに、地域内の縦割りを打破し、観光事業者や観光地域づくり法人（DMO）と、交通事業、漁業、農業、地場産業などの多様な事業者が連携し、観光資源の磨き上げを行う体制を構築していくことが重要となる。こうした観点を踏まえ、観光庁では、観光地域づくり法人（DMO）、観光協会、交通事業、漁業、農業、地場産業などの観光関連事業者や地方公共団体など、地域に根ざした様々な関係者が連携の上で観光資源を磨き上げる実証事業を公募・支援し、これらの実証事業の実施を通じ、観光需要の回復や地域経済の活性化に向けた域内連携促進の方向性について検証を行っている。

（観光庁「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業 公募要領」より抜粋筆者要約）

3.1.2 和歌山県古座川町が取り組む実証事業概要

2021年度、古座川町観光協会が事業主体となり、観光庁が公募する「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」応募し採択となった。事業名「和歌山県古座川町における産学官民連携による観光型過疎地域課題解決実証事業」におけるその事業概要は以下の3点である。

1点目は、古座川町における観光対策戦略策定である。観光における課題抽出や資源の活用、プロモーション戦略の策定を行う。

2点目は、観光コンテンツの発掘である。狩猟や農業などの生活をコンテンツ化して、プロモーションを行う。

3点目は、4つのモニターツアーにおける実証実験である。コロナ禍における新たな観光スタイルの構築と現地でしか味わえない観光・食の提供を行う。モニターツアーにおけるターゲットは、「関東圏内からの大学生」「関東圏内からの社会人」「キャンプに興味関心のある社会人」「日本にいる在留外国人」という4つのカテゴリーに分類される。具体的な取り組み内容としては、社会人対象のワーケーションの実証実験、大学生対象のスタディケーションの実証実験、在日外国人対象のツアー実証実験、キャンプイベントの実施が挙げられ、いずれも徹底した新型コロナウイルス感染症対策のもと、行われる。

古座川町には観光資源が多く点在しているが、その観光資源の発掘、魅力の発信ができていないのが現状である。また、町外からの観光客が観光資源を自由に利用しているため、ごみの放置や禁止区域での利用など諸問題が発生している。

実証事業では、観光資源の活用方法やガイドラインの整理・策定、四季折々の魅力を通したリピート客獲得につながる独自コンテンツの企画開発が期待される。

3.1.3 スタディケーション実証実験概要

本研究では古座川町が取り組む実証事業を受けて新しい観光教育のあり方（スタディケーション）を検証する。

スタディケーションとは「スタディ（勉強）」と「バケーション（休暇）」を組み合わせた造語であり、

定義としては「大学生が旅行先で現地の人々や参加者同士での交流を行うこと、実践型PBL（Project/Problem Based Learning）の学びに取り組むこと、体験や自由な活動を行うこと」を指す。

今回のスタディケーションの目的は、学生目線で古座川町の課題を見つけ、その解決策を学生独自の視点でプレゼンテーションを行うことである。また、学生が実際に地域を訪れることにより、現地の事業者や町民との交流で関係性を築き、関係人口につなげる。

表3-1 スタディケーション行程表

日次	月日(曜)	行程
1	2021年 10月8日 (金)	※集合は羽田空港第1ターミナル2階出発ロビー10:30 JAL215便 羽田空港 南紀白浜空港 南紀熊野ジオパーク、古座川町内見学 12:00 13:15 14:00 15:30 17:00 ※昼食は各自 オンライン 宿泊地 夕食 レクチャー&ディスカッション 入浴・消灯 17:40 20:00 21:30 【宿泊：北海道大学和歌山研究林・やまさき屋旅館】
2	10月9日 (土)	宿泊地 シビエ 山の光工房 ぼたん荘(昼食) 9:00 9:40 12:00 13:00 .. 滝の拝、サイクリング、キーガーデン .. 一枚岩、夕食&交流会 .. 宿泊地 .. 入浴・消灯 13:30 体験 体験 16:00 16:20 17:30~19:30 20:00 【宿泊：北海道大学和歌山研究林・やまさき屋旅館】
3	10月10日 (日)	宿泊地 鮎のとも釣り&自然学習 ゆず平井の里(昼食) 木工体験 9:00 11:30 12:30 13:00 14:30 オンライン 振り返り&プレゼン準備 夕食 プレゼンテーション 入浴・消灯 15:00 17:00 20:00~21:30 【宿泊：北海道大学和歌山研究林・やまさき屋旅館】
4	10月11日 (月)	宿泊地 .. 一枚岩、eポート体験 道の駅すさみ 南紀白浜空港 羽田空港 8:00 8:30 10:30 11:30 12:20 12:50 13:50 15:00 ※自由昼食 ※羽田空港到着後、解散となるが必ず自宅へ直接帰ること。

出典：筆者作成

(1) スタディケーションの特徴

- ・大学生が初めて訪れる古座川町で実践型PBLの学びを行う。
- ・現地での体験や食事、宿泊、現地の町民との交流で旅の高揚感を体験する。
- ・コロナ禍の大学で標準化された遠隔授業（オンライン）の経験を活かし、オンラインでのレクチャーやプレゼンテーションを実施する。
- ・大学生の学びを深化させるために事前学習（旅マエ）、現地学習（旅ナカ）、事後学習（旅アト）の3段階に分けて実施する。

(2) 日程

事前学習（旅マエ）：2021年10月4日（月）14時～16時 オンライン

現地学習（旅ナカ）：2021年10月8日（金）3泊4日

事後学習（旅アト）：2021年10月20日（水）19時30分～21時30分 オンライン

(3) 参加者

玉川大学 観光学部 4年生7名

玉川大学 観光学部 引率教員3名

(4) 新型コロナウイルス感染症対策

- ・観光庁や株式会社JTBの規定をもとに古座川町観光協会と協議し、参加者の事前のPCR検査や現地で関わるスタッフ全員のPCR検査を実施した。また、現地での3密回避やマスク・手指消毒を要請した。

(5) 2つの宿に分かれて宿泊

- ・やまさき屋旅館…コロナ対策として1人に1部屋をあてがう。旅館のオーナーとの交流が深く、ホスピタリティあふれる贅沢な食事も含めてリピーター獲得の要因となり得る。
- ・北海道大学和歌山研究林…コロナ対策として1人に1部屋をあてがう。交流はなかったが、大学の宿泊施設ということもあり標本室や講義室など学習環境が整っている。質の高い星空観察が可能である。

3.2 学生の成果物（3グループの案）

参加の学生を3つ（2名、2名、3名）に分けた。3日目の夜に遠隔ツール（Zoom）で接続し合計30名が参加した。視聴者は自宅からも参加することができた。

評価は下記となる。

- (1) 事前に古座川町からレクチャーを受け、観光協会のホームページやYouTubeなどから情報を収集することで当日の学びを深めることができた。
- (2) 参加学生7名が体験や交流会を通じて積極的に現地の課題を引き出すことができた。
- (3) 地域の事業者や関係者が学生と真剣に向き合っていた。
- (4) コロナ禍で生活が制限されている中、学生は貴重な体験・経験として積極的に取り組んでいた。また、各グループの提案概要は以下の通りである。

表3-2 グループ1のプレゼンテーション概要

グループ1	ポイント
タイトル	古座川町の魅力発掘 (広報プロモーション)
ターゲット	・子ども連れの家族 ・大学生
具体的な策	①リアルプラネタリウム ②空き家を食べ歩き可能な飲食店に（注文を間違える料理店） ③TikTokによるプロモーション（サンプル動画）
学生ならではの視点	学生をターゲットにしているためプロモーション方法に独自性がある。大人ではたどり着かない発想が活かされたアイデア。
実現可能性	③TikTokについては、観光協会理事会で承認され検討開始。

出典：学生プレゼンテーション概要 筆者作成



図3-1 プレゼンテーションの様子 筆者作成

表3-3 グループ2のプレゼンテーション概要

グループ2	ポイント
タイトル	モノと心が循環する町 (現地のオリジナル観光コンテンツ)
ターゲット	・大学生 ・自然や人との関わりに興味がある人
具体的な策	①ホームステイで第二の「おじいちゃん」・「おばあちゃん」の存在を古座川で作ってもらう ②新しい体験のセットプラン・キャヌー（eバイク・釣り・川遊び・デイキャンプ・カヌーの欲張りセットプラン） ③穴場情報がある開拓マップ（宣伝方法として）
学生ならではの視点	町民と観光客に壁のない観光政策が必要。
実現可能性	②新しい体験のセットプラン・キャヌーはすぐに実現していきたい。

出典：学生プレゼンテーション概要 筆者作成



図3-2 プレゼンテーションの様子 筆者作成

表3-4 グループ3のプレゼンテーション概要

グループ3	ポイント
タイトル	定住人口を獲得するために (古座川町を活用した新たな事業の開発)
ターゲット	・自然を愛している若者
具体的な策	①アグリツーリズム（畑を耕そう）畑管理システムとベジスクリプション ②大学生の短期移住で有償インターンを実施。1週間の研修から始まり、1ヶ月間空き家を拠点に自分のやりたいことをアクションして成果を出す。 ③古座川の杉の木で家を作って、シェアリングで貸し出す
学生ならではの視点	SDGsの社会問題の解決に全てがにつながる発想とシェアリングエコノミー、サブスクリプションモデルといったビジネススキームの提案。
実現可能性	大学生の短期移住プロジェクトは次年度にむけて検討。

出典：学生プレゼンテーション概要 筆者作成



図3-3 プレゼンテーションの様子 筆者作成

3.3 学生アンケート調査の結果から（アンケートの記述と口頭での感想から抜粋）

行程ごとに参加学生からアンケートを取り、結果は以下の通りである。

1日目10月8日（金）の行程

南紀白浜空港から貸切バスにて、南紀熊野ジオパークと古座川町内（街並み、虫喰い岩）の見学を行う。熊野の地形と自然、文化を学ぶことを通し、古座川町の成り立ちを理解する。また、自由行動の時間ではインスタグラムなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下SNS）へ投稿する写真の撮影、名産の柚子アイスクリームを食べるなどした。1日日夜にはオンラインにて現地で働く玉川大学OGである忠志織莉氏による講演が行われた。古座川町の課題を解決する糸口を得た上に、忠氏が古座川町に移住したきっかけを通してキャリア教育につなげることができた。

表3-5 1日目アンケート結果

1日目	気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・素晴らしい自然と温かい人々に出会えた。 ・アットホームな雰囲気気持ちに和らいだ。とてもいい人ばかりだった。 ・こんなにも古座川町の景観が素晴らしいとは思っていなかった。来ることでしかわからない。ありのままの自然に圧倒された。
	課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・南紀熊野ジオパークの滞在時間が少なかった。 ・堅苦しい修学旅行のような内容だった。 ・古座川町の住民と話す機会が少なかった。
	調査結果	<p>1日目は、交通機関の都合上、移動時間が大半を占めていた。見学を行うことができたのも2箇所程度にとどまり、施設の見学や町民との交流には時間的な余裕が不足していた。しかしながら、事前に写真や動画で見た古座川町を生身で体感することで、参加学生は本物に触れ、感銘を受けていた。</p>

出典：学生アンケートの結果 筆者作成

2日目10月9日（土）の行程

2日目は現地での新しい体験を中心に行う。ジビエ山の光工房、施設見学、ソーセージづくり、滝の拝の見学、サイクリングやキーガーデンでのハーブ摘み体験などそれぞれの体験の中で、食育や環境学習、SNSへ投稿する写真の撮影などの経験ができた。また、一枚岩を通して熊野ジオパークで学んだ大自然を体感し、一枚岩の道の駅での交流では現地の各ステークホルダーから課題解決の糸口を得た。現地の人々からのサプライズムービーではホスピタリティやそのホスピタリティへの感動を体感し、人と人とのつながり、温かみといったものを改めて学んだ。

表3-6 2日目アンケート結果

2日目	気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・古座川町の魅力を直接体験して、観光事業に取り組んでいる人々の話を聞くことができた。一枚岩のサプライズ動画は気持ちがよく伝わってくるもので、とても感動して特別な思い出となった。 ・これまで体験したことのないソーセージ作りや初めて口にしたハーブティなど内容の濃い時間を過ごすことができた。 ・町民の熱意に心が揺さぶられた。
	課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての体験や見学が楽しかったが、疲れた。 ・スケジュールが詰め込まれており、疲れた。もう少し時間的にゆとりのあるスケジュールにしてほしい。
	調査結果	<p>2日目はスケジュールが分刻みとなり、移動も多く、体験時間や休憩時間が短かった。参加学生にも疲れが見えた。しかしながら、初めて体験するものでも戸惑いながらも真剣に取り組んでいた。夕方の現地の人々との交流会では、町民から現状と課題を聞くことができ、また参加者からも仮説に対するアドバイスをもらうことができた。疲労感を抱えながらではあったものの、非常に有意義な時間となった。</p>

出典：学生アンケートの結果 筆者作成

3日目10月10日（日）の行程

鮎の友釣り体験を通して自然・漁業体験を実施。また、昼にはゆず平井の里にて、柚子農家からのレクチャーを受ける。北海道大学和歌山研究林の施設での木工体験では、オリジナルのコスターを作成。その後、プレゼンテーションに向けた準備をグループごとに行う。夜のプレゼンテーションでは、現地の課題を十分に分析した上で斬新なアイデアを展開していた。オンラインプレゼンテーションを通して課題発見力、論理力、創造力、表現力の育成につながった。

表3-7 3日目アンケート結果

3日目	気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・鮎の友釣り体験は滅多にできないものなので、良い経験になった。 ・川がとても気持ちよく、心身が洗われるようだった。 ・普段体験できないことができる点では、非日常を楽しむことができ、満足度も高かった。
	課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・鮎の友釣りは釣果によって不満につながる。 ・川にいる生物の生態系について教えてもらいたかった。 ・木工体験（コスター作り）ではもう少し時間がほしかった。現地で作った印などがあると特別感も出るし、より良い思い出になると思う。
	調査結果	<p>3日目は、全員が初めての鮎の友釣りを行ったが、季節の関係で釣果はなしだった。そのため、参加学生の満足度は低かった。しかしながら、川の生物の生態系について学びたい、魚の網焼き体験があるとよいなど前向きな意見も見られた。3日目の夕方はプレゼンテーションに向けたグループワークがあったため、比較的早めに宿舎に戻った。夜のオンラインプレゼンテーションでは、町民のインタビューや体験を参考にしながら、課題に対する解決策を力強く提案できていた。参加学生の古座川町への改善意識も高く、非常にレベルが高いやり取りが行われていた。参加学生にとっては将来の可能性を広げる教育機会になったと言える。</p>

出典：学生アンケートの結果 筆者作成

4日目10月11日（月）の行程

最終日は、一枚岩でeボートに乗り、水辺散策による自然体験、また買い物も行った。最後の解団式では参加者全員が涙で別れを惜しんだ。4日間を過ごした中で、参加学生のモチベーションが最も高まった日だと言える。

表3-8 4日目アンケート結果

4日目	気づき	<ul style="list-style-type: none"> ・eボート体験は足が濡れず、透明度の高い川の中で別の世界が見えたような感覚になった。魚の説明もあり、学びながらも楽しむことができた。 ・朝の時間のeボート体験は澄んだ空気が気持ちよく、爽やかな目覚めにちょうどいい。
	課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・eボート体験は、一枚岩だけではなく他のルートも回ることができると良い。 ・南紀白浜空港から古座川町までの移動手段、移動時間がネックである。
	調査結果	4日目は、これまでの疲れが見えていたので、比較的ゆったりとしたスケジュールで朝はeボート体験、その後は道の駅での買い物を行った。最後の解団式では、今回関わった現地の人々へ参加者全員から感謝の気持ちを伝えた。

出典：学生アンケートの結果 筆者作成

3.4 小括

「コンビニも、マンションも、信号もない」と言われる和歌山県古座川町を初めて訪れた参加学生にとっては、衝撃と発見の多い時間であったと思われる。一方で、「第2の故郷になった」「机に座っているのは学べないことが数多くあった」「学生目線で古座川町は癒しであり、学びや発見の多い空間であった」「実際に訪れて肌で感じ、地元の人々へのヒアリングを通して、調べるだけでは見つからなかった観光資源を見つけることができた」などの意見から印象的、かつ深い学びの機会を得られたと言える。また、参加者の全員が「一番印象に残ったのは古座川町の人である」と回答している。このことから古座川町においては人が財産であり、それが魅力になっていると判断できる。その後、参加者から「必ずまた訪れたい」という意見も多数出たことを考えると、今回の試みが関係人口、交流人口につながり、現地にとっても良い影響を与えたと言える。

3.5 スタディケーションを終えて

(1) 古座川町観光協会からの評価

一般的に地域活性には「よそ者、若者、ばか者が地域を変える」と言われている。大学生が地域の課題解決に向けて動くことで、地域の人々も斬新なアイデアを通して考えの幅を広げることが可能になる。古座川町観光協会として今回初めて大学生を受け入れた。受け入れの成果としては以下の点が挙げられる。

- ・大学生独自の視点から地域の課題を解決するアイデアを出すことで、町民にとっても斬新な気づきを得られる機会になった。
- ・若い世代が訪れることで地域の町民が生き生きと活性化される。一方で、課題としては以下の点が考えられる。
- ・地域の課題と向き合いながら解決策を実行するためには、4日間だけの短期間ではなく、長期間(1ヶ月間など)または複数回訪問することが必要である。
- ・学生からの提案の中で、実現可能性の高いアイデアもあり具現化が進むこととなった。

(2) メディアからの評価

今回のスタディケーションの取り組みはメディアにも取り上げられ、新しい観光教育のあり方について紹介された。学生達の取り組みが記事化されたことにより、事後学習(旅アト)の段階でもモチベーションを維持しながら、提案の具現化に向けての学習が継続する効果が見えた。



図3-4 紀伊民報2021年10月14日紙面



図3-5 Yahoo!ニュース2021年10月13日

4. おわりに

4.1 古座川町スタディケーションで得られた知見

学生の問題解決能力を向上させる方法に、実践型PBL (Project / Problem Based Learning) がある。PBLでは大枠の問題設定のみを与え、学生はグループで能動的に問題を分析し解決策を立て、実施と評価を行う。実践型では、実際に社会や地域における問題に取り組む。また、実践型では実問題を取り扱うため、社会的な意義やその理解などについての学習効果が高い。しかしながら、その一方で様々な制約条件が関わってくる。問題の解決にあたり現地の人々のインタビュー調査や現地では本物に触れる体験が必要なため、学生の感情も現地に反映される。だが、学生が心情的にも入り込み、現地の人々と交流しながら、現地の課題解決を考え、プレゼンテーションすることで、そこに価値が生まれる。また、今回はスタディケーションということで、バケーションの要素も入った。サイクリングやeポート体験などの遊びの要素や現地の町民との交流ができ、学生にとっては非日常を経験できる。

今回のテーマである「大学生まちづくり教育の可能性について」の観点からすれば、町民側は大学生が訪れることで活性化され、さらにはその継続性が求められた。大学生にとっては、自身のキャリアを考える良い機会となった。学生が訪れるのみのイベントで終わらせるのではなく、継続的な関わり合いを持たせることも重要である。第2の故郷として、学生自身も地域、大学と地域の関係性を継続させることが関係人口、交流人口につながる。

4.2 観光教育のあり方と可能性

今回のようなスタディケーションは、観光教育に直結する。観光教育とは、「観光分野における人材育成を目指した教育」と定義されており、観光庁でもこの観光教育の普及を推進している。また、発地側と着地側の両方の視点から観光が果たす役割について考える必要がある。今後、スタディケーションとして全国の地域と連携した実践型PBLを増やすことが急務である。ただし、そこでは単年度で終わる一過性の取り組みではなく、旅マエ・旅ナカ・旅アトを複数年続ける継続性に重点を置くべきと考察する。

大学生まちづくり教育のあり方



図4-1 大学生まちづくり教育のあり方イメージ図 筆者作成

4.3 今後の方向性と研究の課題

今回を起点とし、次年度も大学生のスタディケーションを実施していく。現地の観光協会も継続的な長期の関係性を求めている。次年度の計画では、今回の参加者からの提案でもあった長期のインターンシップ機会として大学生を現地に派遣し、学びと休暇、そして地域の活性、地方創生につなげることを計画している。

本研究は観光庁実証事業「スタディケーション」を通じて新しい観光教育のあり方について調査・検証したものである。旅マエ、旅ナカ、旅アトの局面において観光教育のあり方について発見を感じたことに意義を感じている。

しかしながら、学生7名による検証結果であるため一般化できない。更なる新たな観光教育のあり方の精度を高めるために継続的に検証することとしたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、古座川町観光協会会長須川陽介様、事務局池田美奈希様はじめ古座川町関連事業者の皆様には、スタディケーションの運営に際して貴重なお時間を割いていただき心より御礼申し上げます。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

参考文献

明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（平成28年）教育関連
観光庁「地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業」（第1次）公募について

- https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics08_000174.html 2021年11月19日閲覧
観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」における実施事業の公募について（第二次）
- https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics08_000159.html 2021年11月19日閲覧
紀伊民報「学生視点で資源磨き上げ」2021年10月14日
- 国立社会保障・人口問題研究所 https://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp 2021年12月20日閲覧
国立社会保障・人口問題研究所 日本の将来推計人口（平成29年推計）
- 古座川町産業振興促進計画 令和2年2月25日
古座川町第5次長期総合計画後期基本計画 2020-2024
古座川水のまちづくり推進協議会 「古座川風土記」（2013年5月）
古座川町役場 <http://www.town.kozagawa.wakayama.jp/> 2021年12月20日閲覧
須賀由紀子（2018）「地域活性と持続可能な大学と地域の連携」『実践女子大学生生活科学部紀要第55号』53-62
- 総務省統計局 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.html> 2021年12月20日閲覧
高橋B.徹（2021）「研究プロセスにおける問題発見の重要性を学ぶためのPBLの提案と実践」『実践女子大学生生活科学部紀要第58号』31-40
- 田中輝美（2017）『関係人口をつくる』木楽舎
田中智麻（2015）「観光を題材とした地（知）の拠点整備事業の可能性」『名古屋学院大学研究年報第28号』21-37
- 田村明（1987）『まちづくりの発想』岩波新書 152-153
寺本潔（2020）「観光教育と社会科教育の親和性に関する一考察」『玉川大学教育学部紀要第20号』51-65
日本創成会議・人口減少問題検討分科会 「ストップ少子化・地方元気戦略」
Yahoo! ニュース「学生視点で資源磨き上げ 古座川町観光協会が実証実験」2021年12月20日閲覧
<https://news.yahoo.co.jp/articles/d331c0d24a5941fa6295ef9973f4ed8e4d0a2ef5>

（こばやし ひとし）

（みき ひでお）

The Possibility of University Student Community Development Education

Hitoshi KOBAYASHI, Hideo MIKI

Abstract

In various parts of Japan, efforts are being made to revitalize regions by increasing the number of tourists. Universities are also actively promoting studies on the theme of regional revitalization as a place for practical social studies. The revitalization of the economy through tourism has been positioned as one of the important national policies, and there is a need to develop and strengthen the tourism human resources who are responsible for such policies. In this study, based on the study of a demonstration project -studycation- conducted in Kozagawa Town, Wakayama Prefecture, the ideal form and issues of university students' community development education are discussed.

Keywords: studycation, community development education, Kozagawa Town